

1. 表面処理技法の改善研究

堀切 政幸

やまぐるま、みやこだら、杉・檜（間伐材）、けやき、やくたぶを主材料とした研究試作品に塗装技法の改善によって、その表現効果を試みた。

(1)やまぐるまは各工程ともぬれ色現象が大きくて、その被膜効果は得られなかったが、みやこだらは、ぬれ色現象、被膜効果、作業性など総合的に好結果が得られた。なかでも乳状白ラックニス50%溶液を下塗した工程は特に材質感が強調された。

(2)けやきによる盛器では、普通材には摺漆技法を施し、材ムラ製品には溜塗のスプレー仕上げで、その工程をすゝめた。

(3)やくたぶの応接台を色調による重量感を付与するために、摺漆のみでは彩色効果に乏しいので、ウレタンシーラーのステインによって調整を行い、漆剤は乾燥加減・スケ度の最も標準的な消朱合を用いた。

2. 蒔絵量産技法の開発研究

屋久杉製品（かがみ板部）の蒔絵試作によって、その製品の強調加飾部分として、応用したものである。

(1)帯状に絵付けすることで製品に適合する、基板の寸法調整を考慮した。

(2)絵を浮きだたせる手法として背面を金色に配らい、屋久杉材色に調子を合せた配色を特に行なった。

(3)左右対称の絵付けには、加工費の軽減も考慮して、製版の両面使用を試みた。

(4)合成漆の色調と材質の活用によって、大部分この漆剤を用いた。

間伐材利用による試作研究

上原守峰・堀之内輝男

間伐材は様々の欠点を有するため低質材としての利用を強いられてきた。本年度は、心持丸棒の特徴である木口面に出現する同心円状の年輪や丸棒側面の連続した木目を有効に生かし、高度利用を図る目的で三角形の多目的ツールを試作し、その加工特性及び塗装・ツールの構成について検討した。

(1)丸棒削機で削られた径57ミリの小丸太は、曲がりがあるため直線部分の木取りが困難で、長尺で正確さを要求したものには向きにくい。又、丸棒をすき間なく並列に接合する構成は曲がりや日やせのため、間隙が不揃いになり商品価値が落ちるので、ある程度離れた方が無難である。

(2)割れは、間伐材の個性としてそのまま利用したが、割れ幅の狭いもの、割れ長さの短いものであれば割れ方向や配置を画一的にならぬよう処理すると、それ自体が装飾模様となり面白味がある。

(3)屋外用での使用も含め、防腐、防カビ、防虫効果をもつ木材保護着色剤を使用した。木口面で特に暗緑色を呈するコニファー着色剤を除けば落ち着いた感じの仕上りになり色彩効果はあった。又、スギの方がヒノキより浸透性が良く木目の強調にはより有効である。

(4)着色された三角形のツールは、スタッキングができるとともに、組み合わせで様々の形態が表現でき、多目的使用が期待できるが、色・形を変えて雰囲気を楽しむ広いスペースでの使用が望ましい。